

鶴屋南北全集

第七卷

鶴屋南北全集

第七卷

編集委員

郡司正勝

廣末保

浦山政雄

大久保忠国

藤尾真一

竹柴惣太郎

鶴屋南北全集 第七卷 ———— (全十二卷)

一九七三年五月三十一日 第一版第一刷発行

定 価 五、五〇〇円

編 者 郡司正勝 © 一九七三年

発行者 竹村 一

発行所 株式会社三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三(二九九)三二二一番
振替東京八四一六〇番
郵便番号 一〇一

印刷所 株式会社三陽社
製本所 株式会社鈴木製本所

凡例

表記は、底本のままを原則としたが、読みやすくするために、次の諸点に手を加えた。

- 1、台帳では、セリフの冒頭や、ト書きの文中の人物を、俳優名で示すが、これらは役名に改めた。但し、不自然な形となる場合、たとえば早替りなど、また、若い衆、大部屋などの大勢を称する場合の役者名ならびに名称は残した。
- 2、役人替名は各幕ごとに付した。なお、役名の乱れは、番付と本文とを勘案して統一した。
- 3、各役のセリフごとに行を改め、セリフの頭付け「一」は省略した。
- 4、漢字の字体は現行の新字体を用いた。なお特殊な用字や草書体は次のごとく処理した。

吳→異	莖→台	枚→数	鷹→嶋	寄→崎
忝→松	勒→勤	宜→宜	紬→結	鞆→鼓
扣→叩	鋤→劍	尻→尻	襲→装	勢→勢
棄→奪	ホ→等	秋→抜	沾→迄	
廣→魔・摩	欄→欄			
柳→柳	ハ・ハ→候	々→参らせ候	ハ→也	
ヒ→被	ムリ升→ござります(せ)	ふ→より		
斗→ばかり	ベ→しめ	と→こと	ふ→さま・さん	
ハ→かしく	成→なる・なり	是→これ・この		
被成→なさる	此→この	其→その	爰→こゝ	
能→よく	斯→かく	夫→それ	タア→タベ	
- 5、仮名づかいは、すべて底本のままとした。また、助詞、ことばの語

尾などに用いられた片仮名のハ・ミ・ニなどは、特殊な場合を除いては平仮名に改めた。

6、本文中ルビの原則は次の通りである。

イ、底本の仮名を漢字に改めた場合、底本の仮名は当てた漢字のルビとして残した。

ロ、読みにくい漢字には、*印を用いてルビを付したが、この場合は現代仮名づかいを用いた。

ハ、底本に付されているルビには()を用いて原形を示した。

注、恵咲梅判官晶辰は底本の仮名に漢字を改めた場合、底本の仮名は当てた漢字のルビとして残し、読みにくい漢字には現代仮名づ

かいの()ルビを付した。

7、句読点ならびに清濁は、校訂者の見解によってこれを施し、また改め正した。

8、思い入れを表わす記号「○」や、反覆記号は、底本のままとしたが、「々」は、漢字・平仮名・片仮名の場合に応じ、それぞれ「々」「々」「々」に改めた。

9、当字は底本のままとしたが、明らかな誤字は正し、脱字は()を付して補い、衍字は削除した。

10、校訂者が意識的に補った場合(意味不明・参考補足等)は、「」を用いた。

11、原本のままの場合はママと片仮名でルビを付した。

12、草双紙は平仮名で表記されたものがほとんどなので、適宜漢字をあてた。

13、虫喰い・不明は、それぞれ□□とし、ムシ・フメイとした。

鶴屋南北全集 第七卷 目次

惠咲梅判官鼯肩	7
曾我梅菊念力弦	15
四天王産湯玉川	157
惠方曾我万吉原	251
蝶鷯山崎踊	367
昔仝今物語	445
解説（郡司正勝）	475

校訂

惠咲梅判官鼻眞…………井草利夫
會我梅菊念力弦…………郡司正勝
四天王産湯玉川…………落合清彦
惠方會我万吉原…………上原輝男
蝶鵜山崎踊…………菊池 明
昔仝今物語…………郡司正勝
錦絵（會我梅菊念力弦）…………大久保忠国藏

鶴屋南北全集 第七卷

恵咲梅判官最眞

第一番目 六建目 大詰 摂州源平谷の場

役人替名

一 軍場新地の判人源六実ハ八栗八郎景友	嵐 三八
一 軍場新地福原屋お針おゆく実ハ江田の	市川 おの江
一 源三弘経妹夕波	尾上 菊五郎
一 平の宗盛	都 伝之助
一 御殿の喜三太	荻野 伊三郎
一 鈴木の三郎重家	浅尾 勇次郎
一 江田の源三弘経	市川 新蔵
一 信夫の七郎義連	尾上 伝三郎
一 杉目の小太郎近国	坂東 彦三郎
一 鷺の尾三郎義久	大 ぜい
一 軍兵	

本舞台一面、一の谷つゝし山の景色、赤白の源平つゝし盛りの体。こゝに判人源六どくろをもち、おゆくやはりやつしのお針にて、ぶら〇を差つけ、さへて居る見へ。どんちゃんの内、へঁぶしをかぶせ

て、引返して、幕明く。

ト兩人、一寸立廻り有て、

源六 女め、さへて何とする。

ゆくこりや、手のわるひお客さん、あがるとそふく女郎衆もよばで、そのまゝお婦りとは、さしがあつての事で有ふ。せめて一トきり、芸者衆でもお呼なさんせ、お客さん。○

ト源六が顔を見て、

ヤ、おまへはさつきにごさんした、

源六 お客にあらぬ判人の、この源六を見忘れて、

ゆく留たお針の不気転もの。テモ、ぎやうさんなよいお客。さしが有なら女郎衆にかわる色じかけ、體にこゝに、

トどくろをさし出す。八郎、立廻つて、

源六 油断のならぬ女がふるまい。扱は源氏にゆかりのやつだな。

ゆくいふにや及ぶ。江田の源三弘経が妻の夕波、兄のさし図に入込所、

平家の残党、余類の曲者、清盛殿のそのどくろ、速に渡すまいか。

源六 こしやくな女の小さし出た、いかにもおのれがいふ通り、宗盛公の近臣八栗八郎景友が、持参のこの品渡そふや。道あけて通ふせ。

夕波 こしやくや、渡しや。

景友 そののけ。

景友 それを。

夕波 かくて。

ト切付る。立廻りよろしく、はやり唄の中へどんちゃんを打込し鳴物になり、たて有て、ト夕波、どくろを持、むかふへは入。八郎

景友、跡を追ふては入。下座より、平の宗盛、丸龍の付し白衣の着込、りゝしき形にて、ぬき刀、軍兵六人、いづれも四天の形りにて、

縫にて取まき、立廻りながら出て来り、よろしく留て、

軍一 もはや通れぬ、平家の大將、

軍二 宗盛どのとしたるうへは、

軍三 討取まいれと、源家の忠義。

軍四 鈴木の家、源三弘経、

軍五 両家のさし図に、一の谷、

軍六 須磨の内裏を又候や、とりかこんだる上からは、

軍一 のがれぬ所だ。うで、

皆々 まわせ。

宗盛 こしやくな匹夫に、目にもの見せん。

軍四 そりや、

皆々 やらぬは。

トこれより太鼓入になり、宗盛、六人を相手にたて有て、きつとなる。後より御殿の喜三太、半切衣裳、りしき形にて、飛で出、宗盛をきつと留る。

宗盛 ヤア、端武士め、さへて何とする。

喜三 天運尽たる平家の一門、宗盛殿を召とらんと、まづ壱ばんに向ひしは、義経公の忠臣、御殿の喜三太とはおれが事だは。○最早のがれぬ、宗盛どの。尋常にうで廻したく。

宗盛 こしやくな匹夫め、のくまいか。

トこの時、上下の立木へ矢、忒すじ立(つ)。これをきつと見て、

我に射かけしこの矢のぬしは、

重家 源家の忠臣、鈴木家の三郎重家、

弘経 江田の源三弘経、宗盛どのへ、

皆々 見参く。

トつかけどん／＼になり、揚まくより、鈴木家の三郎重家、後、鉢巻はちかづら、陣羽織、大口、着込の形にて、弓矢を持、跡より信夫の七郎義連、りしき形、東の口より、江田の源三弘経、うしろ、鉢巻、陣羽織、大口、着込の形にて、弓矢をもち、跡より杉目の小太郎近国、りしき形、左右より出て来り、入かわつてきつと留る。この時、軍兵、大勢ばら／＼と出て来り、かこみ居る。

重家 平家の大将宗盛どの、

弘経 最早叶わぬ、

義連 御覚期あれ。

近国 宗盛 扱は、さいぜん入込し、汝等連も源氏方よな。

重家 侍客の里遊とは、この家の様子を見出さんと、この程よりの里通ひ、推量なせしにたがわぬ企。

弘経 誠は源家の御大将、九郎判官義経公の御内、江田の源三弘経。

重家 我も忠義のその一人、鈴木家の三郎重家。

義連 信夫の七郎義連。

近国 枚目の小太郎近国。

喜三 かく八方を取かこめば、

弘経 もはや退れぬ、宗盛どの。宝剣渡して降参有るか。但し組留、縄

かけふか。

重家 返すいかに、

三人 ナ、なんと。

宗盛 ヤア、いわれざるその一言。朝敵謀反の義経が、幕下にしたがふ汝等に、詞が有ふか。たわけた事を。

重家 流石は平家の御大将、位有て猛き御有さま。今こそ御へんへ天皇

の、

宗盛 なんと。

弘経 三郎義久、はやお来やれ。

トつかけどん／＼になり、鷲の尾三郎義久、半切衣裳、りしき形にて、金冠を持、右に船頭八嶋屋善八が切首を引さげ、はしり出て来る。

三人 鷲の尾三郎、お来やつたか。

義久 安徳帝の御冠、はい、取逃行曲者め、引とらまへて拷問なせば、宗

盛殿に一味の強盗。すぐさま首うち、御冠、たやすく持参致してござる。

弘経 有て益なきその金巾子、宗盛どのへ、この場に於て、

ト義久、冠を宗盛へ渡す。

宗盛 すりや、天皇のめされし冠。

喜三 平家の宝を平家へ渡し、宗盛殿は我／＼が、

ト立かゝる。

重家 ヤレ、またれよ。この場におゐて召捕とも、我君さまのこの度の

御疑ひの雲霧も、

弘経 はれねばやはり我々も、鎌倉よりの御咎。平家に同じ日かけもの。

御連子、和睦の願ひもこれ迄。

義久 時至らねば、皆ひが事。

三人 おんてきながら宗盛どの、

重家 この場はこの假見のがし申さん。

宗盛 すりや、宗盛をこの假に、

弘経 見のがし申も、過給ふ重盛どのへ、義経公、恩を射(謝)すべき寛

仁大度。

宗盛 然らば、この假立別れん。鈴木の三郎、源三弘経。

重家 宗盛どの、

宗盛 かた／＼、

皆々 さらば。○ これより式番目はじまり。さやふに御らん下されませふ。

ト打込になり、宗盛 真中に宝剣を持、三郎重家、源三弘経、喜三太、三郎義久、七郎義連、小太郎近国、左右に引ばり、軍兵、取まき、アリヤ／＼の声よろしく

直に、はやり唄かすめて、禪の動になる。

ま ぐ

第二番目 序 幕 小梅の里源平橋の場

役人替名

- | | |
|----------------------|---------|
| 一 梅基妹小雪実ハ平少納言の息女卿の君 | 岩井 条三郎 |
| 一 角力取壇の浦波右衛門実ハわつばの菊 | |
| 一 王丸 | 沢村 四郎五郎 |
| 一 庵崎松庵の下女おしげ | 山科 甚吉 |
| 一 植木売り松太 | 荻野 仙花 |
| 一 女非人おしやべりおとら | 桐山 紋次 |
| 一 女非人お手元のお市実ハ藤の森小女郎狐 | 岩井 条三郎 |
| 一 庵崎松の庵の梅基実ハ佐藤忠信 | 尾上 菊五郎 |
| 一 駕の者二人 | 若 い 衆 |

本舞台三間の間、上、手へよせて誂の非人小(こ)家、川江むけて椽側、手すり、武枚せうじを建たる窓、よき所に白梅盛りの体。舞台正面は高足にて誂の橋、上、の方にも小橋を見せ、傍(わ)り杭に奥街道小梅村源平橋と印し、一面の雪景色、都而小梅枕(まくら)ばしの体。右の鳴ものへ時のかねをかぶせて、引返して、幕明く。

ト雪、大分降、むかふより梅基妹小雪、袖頭巾、ふり袖、よそ行(き)娘の袴、ぬり足駄、蛇の目の傘、跡より壇の浦波右衛門、前髪角力取の袴、片はしより、下駄、浪蛇の目の傘。おしげ、下女の形り、足駄がけ、洲崎村松の庵といふ番傘をさし、跡より松太、植木り、世話形にて、竹のぼつてう笠、糸だてを着て、四ツ手のうへ木荷、やぶこうじ・水仙の類ひ、誂の鉢(はち)うへの梅を花荷(はなかり)にしてかつぎ、付て出て来り、花道にて、

松太 モシ／＼、足駄の齒へ雪がたまつて、おあぶなふござります。

小雪 こりや、おまへは植木屋の松太さんじやないかへ。

波右 ア、こりや、大師さまの緑日に出かけたのか。この寒ひのに、

ハテ欲ばつた男だ。

松太 イエモウ、商売つくなら、鑓がふつても出かれますよ。

しげ シテ、関取さんは場所からのお帰りでござりますかへ。

波右 そふさ。どふで、けふの角力は入かけになつたゆへ、何でも大雪にならぬ内、向嶋迄ぶつ付よと回向院を出ると、ちら／＼降て来て、とう／＼大雪になるやつよ。そりやそふと、お雪さん、おまへはどこで雪に逢なかつた。

小雪 アイ、わたしや兄さんと連だつて、観音さまへおまいり申て帰りがけ、もやふしたこの初雪、大きに難義致したわいな。

しげ 殊に、おゆきさんはお松がお嫌ひ、駕を申てやりましたが、あんまり永ふまたせるゆへ、そろ／＼こゝ迄、おつれ申たのじやわいな。

波右 どふして／＼、これから又、土手へかゝると、一ぱい雪道であるき憎ひ。かふするがよい。おまへの内迄、わしがおぶつていつてやりませふ。そふしなさい／＼。

小雪 そりや嬉しうござんすが、そろ／＼と往て見やんせうわいな。

波右 イヤ／＼、わるい事はいわぬ。サ、わしにおぶさるがよい／＼。

しげ そふなされませ。道が歩行にくふござります。

小雪 そんなら、お慮外ながら、

波右 サア／＼、おぶさつたり／＼。これが誠におはん長右衛門。ア、

コレ、こゝらで上るりを願たいナ。

小雪 何をじやら／＼と。

松太 サア、又降て来たは。

トはやり唄にて、この人数、本舞台へ来る。小雪が襟にかけし守袋、さがりて、波右衛門が目先へ出かゝり居る。

サア／＼、こゝからはモウ一ぶく吸付て、雪見ながらに行やせう。

ト腰のたばこ入をさがす事あつて、

南無さん、たばこ入を忘れて来たわへ。

しげ おまへ、雪道へ落しなさんしたかへ。

松太 イエ／＼、大川橋で髪を結ふ内、アノ床へ忘れて来やした。ドレ、荷はこゝへおゐて、一寸取て来よふか。

小雪 そりやおまへ、嘸つめたふござんせうぞへ。

松太 何、ツイトはしり。荷をお願申やす。

トはやり唄、入相のかねになり、松太、むかふへ入々。

波右 アノ植木屋め、あんまり欲ばるから、たばこ入を落したか。大べらぼうめ。

ト小雪、この時、胸のいたき思入有て、

小雪 ア、モシ、どふぞおろして下さんせいナ／＼。

波右 これはしたり、この先が道が悪ひはな。そんな事をいわずと、だまつて取(り)付て居なさいよ。

小雪 それじやといふて、おまへの背なに何やらあるかして、それがわたしが胸へさわつて、むなぐるしうござんす。一寸おろして下さんせ／＼。

波右 何がおれが背中にも有もので。胸ぐるしい、ハテナ、何も背中に有りはせぬが。○ ヲ、ある／＼。そんならうしろへまわして持て居る、アノ名玉が、おまへの胸へ、

小雪 エ、

波右 アイヤ、名玉ではない。あれはたしか、アノ、

トうち／＼して居る。むかふより駕の者式人、四ツ手駕をかつぎ出て来り、

かご モシ／＼、雷神門で旦那さまが、駕をはやく持て往て、おのせ申て送つてくれろとおつしやりますから、いそいで参りました。サア、おめしなされませ。

しげ ア、そんなら、旦那さまが雇ふて遣はされたお駕でござりませふ。小雪 そんなら、兄さんも、モウ来なさんすに間も有るまいが、先へ参つてもよからふかいの。

しげ この寒ひのに、マア／＼早ふおのりなされませいな。

小雪 そんなら、そふせうわいな。サ、波右衛門さん、おろして下さんせいナ。

波右 これはしたり、又おりよふといふのか。駕よりはおれが背中のはふが、見はらしにはよつ程よいはづじやに、おわれてゆくがよからふぞへ。

小雪 じやといふて、胸先へ何やらさわつて窮屈なゆへ、早ふおろして下さんせ。

しげ あのようにいふてゞござります。ちやつとおろして下さりませいな。

波右 それだといつて、脊中のほふがよつ程気がきいてゐよふのに、エ、さまざまな事をいふぞ。

ト小雪をおろす。おしげ、介抱して、

しげ サア、早ふお駕へおめしなされませいな。

ト小雪をおろす時、守の紐きれて落々。小雪、これをしらす。波右衛門、手早く取て懷中する。この内、小雪、駕へのり、

小雪 そんなら、わたしや、お先へ参ります。波右衛門さん、有がたふござんしたぞへ。

波右 どふでも駕か。ハテ、おぶさるほふがよからふにナア。

しげ モシ、閑取さんへ、今にも旦那さんが出なされたなら、お先へまいりましたと、おつしやつて下さりませ。サ、駕の衆、いそひで下さんせ。

かこ 呑込みました。それ、やらかせ。

トはやり唄になり、みな橋を渡つて、下座へは入る。波右衛門、残り、思入有て、

波右 アノおゆきめが落して行おつたこの守、若シ亀男の起證では有まいか。

ト守の内より、結構なる誂の御影を出し、

こりやコレ、俱比羅大王の御影。この神を信心なすは、日の本ならぬ

蝦夷の千嶋の者ならで、おこなふものななきと聞。殊に願主は卿の君と印し有が、そんならこれが、平少納言の息女たる、卿の君の所持なす守か。兄といふのも義経の身よりか。これを證拠に、庵崎の松の庵の梅基が実名聞出す品玉。ハテ、よいものが手に入つたわへ。

ト思入。雷序になり、狐火、波右衛門が目さきへ出る。

又うせたか。おれが手に有るこの名玉。これがほしいか。

ト背中の方より、錦の袋に入りし名玉を出し、

今もおゆきが、胸先へさわるよふなといつたは、おもへばこの名玉。

たとへ野狐の望めばとて、何しに返そふ。立帰れ。長居ひろがば、

ト玉を懷中せんとする。薄どろ、狐火、玉へかゝり、波右衛門たちぢくとする内、思わず玉を取落し、橋下の非人小屋の梅の梢へ落かゝる。

南無さん、名玉。

ト取ふとする。薄どろ、雷序。狐火、来て、梢の方へよせ付ぬ思入。この時、思わず拾ひし守を落す。これにてどろ、やみ、狐火消る。

波右衛門思入。この時、非人小屋より、おしやべりおとら、非人の女房の拵にて、五合徳利を持、酔ふたる牀にて、出かゝつて居る。

ヤ、こゝで拾ふたこの御影、出すとそのまゝ飛去る狐火。そんなら御影の俱比羅の御神、野狐のおそろゝ、

ト守をとり上。

とら ハイ、旦那さん、下さりやせう。

トこれにて、波右衛門、悔りして、

波右 何だ、こいつは。うつかりして居た所へ、後から悔りさせた。

気のきかない。雪女にはあんまり黒ひが、

とら エ、置なさいナ。わつちやア、この小屋のかゝアさ。この大雪にこなからきめたが、立切れねへゆへ、モウこなからと、雪をも厭わ

ず、小梅の酒屋へお出がけ。わつちが小屋の構の内、何かお拾ひなされたね。モシ、旦那へ、それをわつちに下さりやせな。

波右 ヤイ／＼、何をぬかしやアがる。ア、酔てうせるナ、べらぼうめ。おらア何も拾ひはせぬは。

とら イエ／＼、拾ひなさつた／＼。この小屋の門口式間四方は、わつちらが支配内だよ。何だか、たばこ入か、金入か、ひろいなさつた筈だ。きつと見やしたよ／＼。

波右 喰をぬかす乞食めだ。どこにひろつた／＼。
 樋におまへ、こゝに持て居なさるよ。

ト波右衛門が懷へかゝるを、波右衛門、おとらを下の方へ投る。おとら、うつむけに転ぶ。

波右 うすぎたない、こじきめが。

トあたりを見廻し、守を一寸、荷の内には有鉢うへの梅を、そつと取て、梅の根本へ隠し、元のよふにしておく。おとら起上つて、

とら アイタ、／＼、いかにおまへ、関取さんだといつて、わつちらがよふな者をとらまへて、そふむごく投なさる事はねへ。コレ、見なさい。鼻血が出ゐるわな。モウ／＼こんな目に逢ツちやア、猶／＼拾はしつた物をこつちへもらわねばならぬ。サ、出してくんない／＼。

波右 まだぬかしやアがるか。何も拾つた覺はない。それ、見やアがれ。どこに何を持て居る。

とら 樋にこゝらに有ますよ。

ト懷へかゝる。

波右 エ、薄ぎたねへわへ。

トおとらをつまんで引のける。押のつとめ、時の鐘にて、むかふより、松太はこ入を持、帰つて来り、これを見て、波右衛門をとめて、

松太 モシ／＼、関取。何をマア、女こじきをとらまへて。よく／＼の事だ。了簡してやりなさい／＼。

波右 薄ぎたないさまをして、そばへたやつゆへ。

松太 ハテ、よふござりますわな。

とら イ、エ、わつちやアぶたれたよ。関取さんが女こじきをぶたしつ

た。

松太 エ、やかましいは。又くらひ酔たナ。旦那衆にそばへた事をいふな。

とら いつでもよふござりやす。私は酔は致しませぬよ。

松太 ハテ、モウいひわへ、小屋へゆけ／＼。

トおとらをむりに引ずつて、小屋へやり、

イヤモウ、アノかゝアめはくらしい酔と、しみしつこいやつでござりますよ。

波右 そふで有ふ。あいつは悪しつこいやつだ。

松太 モシ、関取へ。烟草入が床にござりやした。

波右 そりや、仕合。よく有たの。

松太 さやふさ。モシ、おさきへ参りやす。

ト荷をかつぎ、ゆかふとする。波右衛門、悔りして取付(き)、

波右 コレ／＼、手前、この荷を、どこへ持て行のだ／＼。

松太 ハテ、私はモウ、内へ帰りますのよ。

波右 サ、そりやア、手前の内へ手前が帰るを、何も留る咄しはないが、おらアちつとこの荷に用が有て、留るのだ／＼。

松太 この荷に何の用がござりやす。

波右 サア、その用といふはナ、

松太 何でござりやすよ。

波右 サア、そりや何よ。○ヲ、それ／＼、その梅の鉢うへがほしいから、買ふと思つて留たのだ。その梅を売てくりやれ／＼。

松太 エ、この梅かへ。そりやアお安い事だが、こりやア、松の庵の梅基さまから手入を頼れて、持ていつたのさ。わしやア今から、この鉢うへを持て参る所さ。

波右 サア／＼、そふでは有ふが、おれもその梅が急にほしくなつた。

松の庵の主人にはいひよふにいつて、何ぶん鉢植を貰はねばならぬよ。

ト荷をとらへて引ばる。

松太 ハテ、おまへはむりをいひなさるお方だ。先約だによつて、そこへやらふといふを、そふむりをいひなさるなら、よふござりやす。先方へは断りを申て、

波右 おれにその梅を売てくれるか。

松太 アイ。

波右 ヤ。

松太 ゆるりとおすゞみなされやせ。

ト荷をかつぎ、つゝあは入。波右衛門、見送つて、

波右 うぬ、植木屋め、よく欺したナ。とつづらまへて、○

トゆかふとして、

イヤ、アノ鉢植ばかりでない。梅の梢へ大切な、○餅、ふりつ

むこの雪に、よもや人目にかゝりもしまいが、かふして置ては、

トむかふへ、思入あつて、

ヤ、むかふへ人かけ。そんならあいつが鉢うへから。そふだ。

ト独吟になり、波右衛門、跡を追て下座の口へは入。ト待乳山の五ツのかね聞へ、しらせにて、橋のむかふの黒幕切て落す。正面打抜、浅草の山、本堂、五重の塔、待乳山、堀の舟宿、今戸の川岸、雪の積つたる景、書おこしよろしく。小屋の内には、独吟にて、寒びきの鉢。梅の小枝にかゝりし名玉のうへへ、鶯、来つて囀る。このとたんに窓のせうじを引ぬく。お手元のお市、女太夫の襟にて、後向にて寒びきをして居るみへ。やはり独吟の内、向ふより庵崎松の庵の梅基、頭巾、好の形にて、前がけ付の足駄、蛇の目の傘をさして出て来る。雪頻りに降。梅基、花道にて、足駄の鼻緒ゆるみし鉢にて、これを直し、本舞台へ来る間に、唄、くさり切。合方残。梅基、思入。

梅基 ア、こゝは小梅の源平橋だナ。馴染の道も皆白妙、川水さへもやわらかに、こゝもあづまの名所とやら、土手のさくらに花屋鋪、沢の螢に川涼、秋の七草、隅田の月、枯野ながらの雪見松、四季の詠

もこれ程に、ア、色に色有ル景色じやナア。

ト鶯を見て、

ア、鶯がさへづるわへ。この大雪に寒音を出して、○イヤ、鶯のさへづりより、あの内の寒びきの声がするが、こゝらに寮もなかつたが、○ア、そんなら、こゝの非人の小屋か。エ、しほらしい哥の唱哥は。

ト思入。又独吟になる。梅基、唄に聞とれ、橋のらんかんにもたれ、よねなく聞居る鉢。やはり鶯さへづる。哥よき程に納る。梅基、我を忘れて、

イヨ、有難ひ、親はないかへ。

ト古風に替る。この時 お市、三絃を持たるまゝ、舞台の方へふり返つて、

お市 だれたナ。いかに非人の小屋じやといふて、悪ル口いふておだてるのかへ。エ、聞たふうな。

ト梅基、これを聞て、

梅基 イヤ、悪ル口じやアねへ。ついこの小屋を覗ひたは、

お市 つゝこの小屋を覗ひたは、

梅基 サ、今、覗ひたは、

お市 何だのふ。

ト梅基、思入有て、

梅基 梅が香や、非人の小家も覗かるゝ。

お市 スリヤ、梅が香に思わすも、

梅基 非人の小屋を、

お市 覗ひた旦那。

梅基 とても美しい、

トお市を見る。

お市 そりや、何がへ。

梅基 サ、盛りの梅が、

お市 雪をおふたる、

梅基 梢に何やら、

お市 エ、

梅基 鶯の、

トあたりの雪をとつて、梢を目当に磔を打(つ)。ぱつたり音して、鶯飛去々。雪散乱して、梅ヶ枝折れて、右の名玉舞台よき所へ落る。このとたんに、

お市 ヲ、こわ。

ト窓のせうじをばつたりさす。梅基、つか／＼と寄て、玉を取上々、思入有て、

梅基 梅の小枝に鶯の、初音を上ヶしは、○ヤ、正しく名玉。

ト驚くはづみに、足駄の鼻緒切れる。このとたんに雷序の頭、梅基の目先へ、お市、山下駄巻足持、中腰につゐト頭れる。梅基、何心なく、

南無さん、はな緒が、

お市 これなとおまへに、

ト下駄を直す。梅基、悔りして、思わず傘を取落す。木の頭。

ヲ、さむ。

ト思入。これをさざみにて、よろしく

まく引付るト、打込、式番目の呼。

ひやうしまく